

## 論文

# デューイの教育方法論から見た新学習指導要領 New Course of Study Considered from Dewey's Educational Methodology

岩崎 由香里<sup>1)</sup>

Yukari Iwasaki

キーワード：デューイ，教育方法論，学習指導要領，栄養教諭養成

Keywords: Dewey, educational methodology, course of study, training of nutrition teachers

### I 緒言

近年，知識・情報・技術をめぐる変化が著しく，情報化やグローバル化といった社会変化が，急激に進展している。コンピュータ等の情報技術は人々の社会生活や日常生活に浸透し，日常生活の様々な場面で，スマートフォンやコンピュータ等を活用することで手軽に情報にアクセスできる状況になった。常に情報を得ることができることは，生活が便利になる反面，スマートフォン等の情報技術利用の低年齢化により，情報技術利用を巡るトラブル等も増大している。子どもたちには，情報技術を適切かつ安全に活用していくための情報モラルを身に付けてさせていく必要がある。また，情報技術を受け身で捉えるのではなく，主体的に活用していく力も求められる<sup>1)</sup>。

このような中，国は，未来社会を創造的に形成していく力として，子どもたちの「生きる力」の育成を掲げ，それをさらに発展的に進めていこうと考えた。

2017年文部科学省は，幼稚園教育要領，小・中学校学習指導要領を改訂した<sup>2)</sup>。幼稚園教育要領，小・中学校学習指導要領等の改訂の基本的な考え方の一つ目は，教育基本法，学校教育法などを踏まえ，これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かし，子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成し，子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し，「社会に開かれた教育課程」を重視するということである。

学習指導要領改訂の基本的考え方の二つ目は，知識及び技能の習得と思考力，判断力，表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で，知識の理解の質をさらに高め，確かな学力を育成するということである。この知識の理解の質を高め資質・能力を育むためには「主体的・対話的で深い学び」を取り入れることが必要

---

1) 山陽学園短期大学健康栄養学科

であるとしている。

学習指導要領改訂の基本的な考え方の三つ目は、道德教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成するということである。

一方、従来の伝統的な教え込む教育に反対し、新教育の必要性を唱えたデューイは、学校とは受動的な学習の場ではなく、子どもたちが生活と結びついた住みかとなる機会をもつ場である「小型の社会」でなければならないという観点をもっており、100年以上前から、学校の中に社会という概念を取り入れていこうとしていたことがわかる<sup>3)</sup>。その背景には、当時の社会の産業化・都市化・技術革新などの動きがあった。さらに、デューイは新教育を「コペルニクスによって天体の中心が地球から太陽に移されたときの変革」<sup>4)</sup>に例えて、「子どもが中心であり、この中心のまわりに諸々のいとなみが組織される」<sup>5)</sup>と表現しており、学校における子どもの主体的な活動の重要性を論じている。仕事(occupation)と呼ばれるこの主体的な活動をベースとして、子ども達は、知識、技能を生きて働く力として身につけ、産業化の進む民主主義社会をよりよく改善していく担い手となることが期待された。

このように、デューイの時代背景とそれに基づく教育についての考え方は、現在の学習指導要領にももちろん影響を及ぼしていると考えられるが、ここでは、その共通点を比較し、デューイの教育理念・教育方法についての思想に立ち戻って、そこから学習指導要領を読み直すことで、学習指導要領をよりよく活かす方法を考えてみたい。さらに、栄養教諭養成課程の教育に、これらの教育方法をどのように活かしていくかを検討していきたい。

## II 学校と、社会の進歩

デューイは、産業社会の進展等により家庭での子どものあり方が根本的な変化を受けたとし、「教育が生活にとってなんらかの意味をもつべきであるならば、それは同様に変わるべきである」<sup>6)</sup>とした。現代においても、情報化やグローバル化といった社会の進展により子どもたちの家庭でのあり方や生活が大きく変化しているといえる。情報技術の進展は、膨大な情報の蓄積へとつながり、職業生活のみならず、学校における学習や生涯学習、家庭生活、余暇等の活動、さらには自然災害等の非常時の活動においても適切に活用していくことが求められる。また、スマートフォンやソーシャルネットワーキング・サービス(SNS)等の急速な普及により、子どもたちが情報を活用したり発信したりする機会が増大し、それに伴い、これらの利用を巡るトラブルが増大している。そのような中、文部科学省は、学習指導要領において、情報モラルを含む情報活用能力の育成を目指して、その教育内容を取り入れた(表1)。

情報活用能力は、生活における様々な事象を情報とそのむすび付きとして捉え、情報技術を活用して、問題発見・解決をしたり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。このような情報活用能力を育成することは、主体的に他者と協働して、新たな価値を創造することを可能にすると考えられる。

デューイの時代とは状況が違っているが、学習指導要領の中で学校教育が社会の変化に柔軟に対応していくことの必要性を認めていることは、デューイの考え方と軌を一にしている。

デューイ的観点から情報活用能力についてさらに考えてみる。今日の社会では、青年期に

達するまでに、時代の要請として、コンピュータの基本的使い方やプログラムについてのある程度の理解、さらに検索能力などの基本的な情報機器操作活用能力を、昔の3R'sと同じように、道具的知識として身につけていることが当然求められていると言えよう。情報活用能力の学習で考えるべきことは、文字入力や簡単な表作成などの基礎基本を身に付けることと、各教科の発展的な学習などにおいて、情報の収集や整理、さらには発表などに活用していくこととの間を、うまく埋めていくことではないかと思われる。その間には今のところ相当のギャップがあり、そのギャップをうまくうめていくことが必要であろう。

今回新たに情報学習にプログラムの基礎が入ってきたように、情報活用能力の基礎も、今後の社会の進展によって、さらに変化し高度化していくものと考えられる。それゆえ大切なことは、単に現在における基礎的な知識や技術を道具的知識として教え込むのではなく、子どもたちが関心をもち、ぜひ学んだり身に付けたりしたいと思うような形で、情報活用への興味や関心をまずは伸ばし、その実現に必要なこととを十分理解させながら、基礎的な知識や技術を学ばせることである。

また、まだ学校に入って間もない子どもは、家庭で自分の親や大きなきょうだいがコンピュータを日常的に用いているのを目にしてきており、自分もやがては使いたいと思うだろう。学校でのコンピュータ学習は、デューイの言うように、こうした子どもたちの興味や関心を重視し、単に系統的・能率的に教え込むのではなく、家庭でやっていることを学校でやってみる、子どもたち自身もぜひやってみたいと思うようなコンピュータを用いた仕事(occupation)として捉えることが大切であろう。そうした目標を目指す過程で、子どもたちは、道具的知識を自ずと身に付け、さらに高度な情報活用へと関心を広げ、そのために自ら積極的に学習し、その過程で数学的・論理的思考やコンピュータに関する様々な専門用語(英単語も含む)なども副産物として身に付け、結果として情報の活用能力が自然と身に付いていくであろう。そういったカリキュラムを工夫し取り入れてはどうかと考える。さらに情報活用能力学習は、プログラミング教育やモラル教育等、新たな学びの創設につながっている。教育の進展は、こうして社会の進展へとつながっていくであろう。

表1 情報活用能力（プログラミング教育を含む）学習

コンピュータ等を活用した学習活動の充実（各教科等）
学習場面 一斉学習における教師による教材の掲示  個別学習 個に応じた学習 調査活動 思考を深める学習 表現・制作 家庭学習  協働学習 発表や話し合い 協働での意見整理 協働政策 学校の壁を越えた学習
コンピュータでの文字入力等の習得，プログラミング的思考の育成 （小：総則，各教科等（算数，理科，総合的な学習の時間など））
プログラミング言語や技術の習得 プログラミングによる問題の解決

（参考：教育の情報化に関する手引き）

社会の変化は、更に情報化以外に食を取り巻く環境にも見られる。食の課題としては、エネルギーや食塩等の過剰摂取や野菜の摂取不足等の栄養の偏り、朝食の欠食に代表されるような食習慣の乱れ等が見られる<sup>7)</sup>。そして、これらに起因する肥満や生活習慣病の問題は、子どもにおいても危惧される状況であることが小児生活習慣病予防健診の結果からもいえる<sup>8)</sup>。また、伝統的な食文化に対する意識の希薄化、情報の氾濫による正しい食情報を選択し活用することが困難な状況も見られる。

このような中、国が策定した食育推進基本計画-第4次-においても、成長期にある子どもへの食育は、生涯にわたって健やかに生きるための基礎を培うために重要であると考えられている<sup>9)</sup>。

食に関する問題は、家庭が中心となって担うものであるが、核家族化の進展、共働きの増加などの社会環境の変化や食の外部化などを背景として、保護者のみで子どもの食生活の管理を行っていくことが困難になっていることも現実である。

このような状況を踏まえ、文部科学省は、子どもに対する食育については家庭を中心としつつ学校においても積極的取り組んでいくことが重要であるとして、「食に関する手引き-第二次改訂版-」を作成した。この手引きでは、栄養教諭が中核となり食育推進体制を確立し、学校・家庭・地域が連携して、次代を担う子どもの食環境の改善に努めることが必要であるとしている。また、子どもに望ましい食習慣を身に付けさせることは、次の世代の親への教育であるという視点を忘れてはいけないことも示している。これらの社会状況の変化から、学校における食育を推進するために、栄養教諭制度が創設された。栄養教諭は、社会環境の大きな変化にともなって、生まれた教諭であるともいえる。ところでデューイは、教育には子どもたちが新しい文化を創造し、社会を成長させていく能力を育む役割があると考えていた<sup>10)</sup>。栄養教諭制度も、創設されたままに留まるのではなく、社会環境の変化や課題に応じて変化するだけでなく、より良き社会を作っていく方向へ向けて、今後さらに進展していくことが望まれる。

### Ⅲ教科の統合と総合的な学習（探求）の時間

デューイは、子どもが能動的な生活をするために、彼らの学習する教科（subject）は自然に統合されるであろう、すべての教科は、必然的に相関的なものごとになるであろうとしている。活動し、問題を解決することが中心であり、知識はその過程で求められ、教育の目的から手段の位置へと立場が変わる。一方、現在の総合的な学習（探求）の時間は、探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目的としている<sup>10)</sup>。両者の共通部分は、実社会や実生活の課題が単一の教科の学びのみでは解決できないことから、横断的なカリキュラムが重要であると示していることにある。

デューイの立場から見ると、課題解決型にすることにより、生徒の意欲や熱意が大幅に高まるので、単なる教科横断的・総合的な学習というよりも、課題解決型・プロジェクト型とすることが望ましい。

学校給食法第10条において、すべての学校で作成することが義務づけられている「食に関する指導に係る全体計画」では、様々な教科等の中で実施されている食に関連する内容を整理することになっている<sup>11)</sup>。各教科等で食に関する指導を行う時には、関連する教科の内容を踏まえることが大切であるとしている。このことから、学校における食育は、デューイが示すように、子どもが能動的な生活をするために、自然に統合された学問の一つではないかと考える（図1）。

栄養教諭が食に関する指導を行う際にも、各教科を横断的・総合的に学習していただくだけではなく、子どもたちが自分の課題を見つけ出し解決する力を育成する課題解決型・プロジェクト型とすることを心がけていくことが必要である。



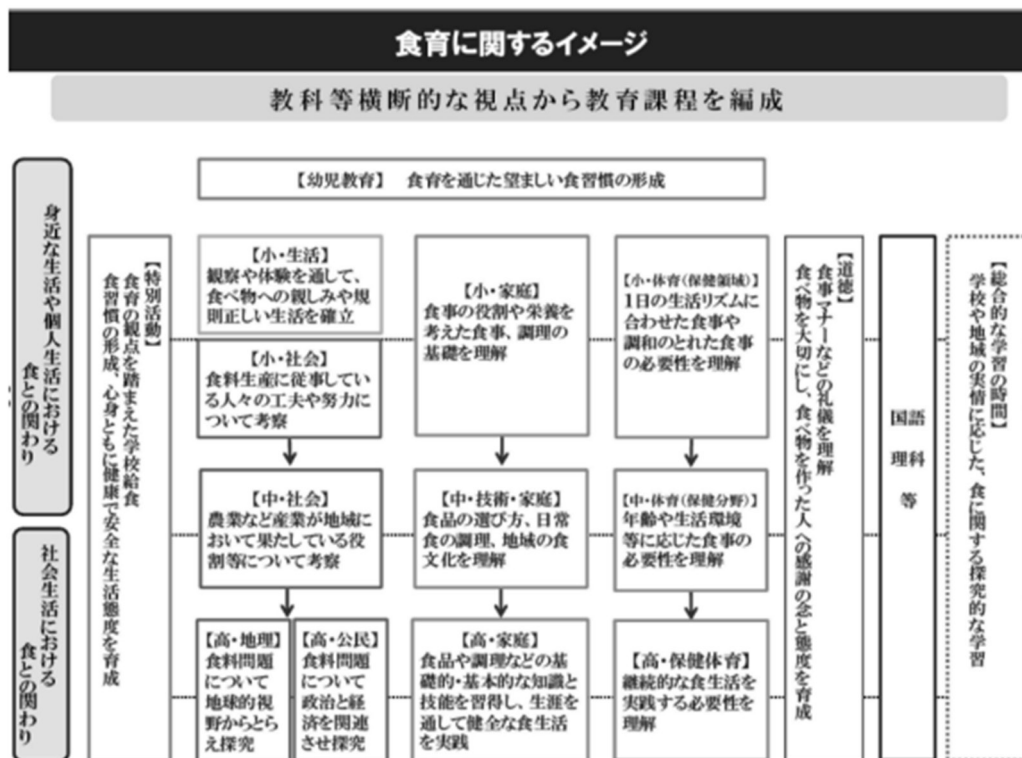


図1 食育に関するイメージ

(参照：食に関する指導の手引き)

#### IV 経験主義と主体的・対話的で深い学び

デューイは、仕事 (occupation) というカリキュラムを学校教育に取り入れ、体験しながら、様々な知識を身に付けることが必要だとする経験主義を掲げていた。一方、学習指導要領では、知識の理解の質を高め資質・能力を育むためには「主体的・対話的で深い学び」を取り入れることが必要であるとしている。「主体的・対話的で深い学び」において、教育者はただ学習者の直接的・内的要求の理解者として付き添うだけではなく、客観的・外的条件の代表者として学習者の能動的な学習を中断させる存在でもなければならぬといわれている<sup>12)</sup>。このことから、「主体的・対話的で深い学び」を行う際には、子どもに自由な学習に任せるだけではなく、教育者がバランスをとりながら学習をすすめていく必要があると言える。

食こそは誰もが必要とし、関わり、関心のある生活上のテーマであり、課題でもある。食の中で子どもたちにテーマをうまく選ばせる乃至設定することで、深い学び、生きる力につながる学びが可能になる。

そこで、栄養教諭が行う食に関する指導においても「主体的・対話的で深い学び」を取り入れていくことが求められているが、そのためには、栄養教諭を目指す学生自身が「主体的・対話的で深い学び」の真の意義を理解するとともに、食に関する指導を行う上でどのように

活用できるか考える力を付けておくことが重要である。

また、食生活教育は広くライフスキル形成に繋がるといわれている<sup>13)</sup>。これは、食の経験を通じて、食の自己管理能力を身に付けていくことができるという考え方である。そこで、具体的な食の経験の例を次にしめす。

- ・調理 献立作成→食材購入の計画→食材購入→調理準備→調理→食事→片付け
- ・食品選択 食品の種類や働きの知識を習得→購入時に知識を生かす

このように、食の経験は、実際の生活に役立つ食の自己管理能力を育成することに繋がっており、栄養教諭養成の教育においても、デューイが提唱した経験主義は有効であると考える。

## V まとめ

本稿ではデューイの教育方法論から、新学習指導要領の内容を見ていくことで、学習指導要領をよりよく生かしていく方法を検討した。学校教育が社会環境の大きな変化に柔軟に対応していくことで、子どもの生活に生きる学習としていくことができる。また、従来の個別の学科の枠を超え、横断的なカリキュラムで学習を行うことで、主体的に課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することができる。この資質・能力を高めるためには、「主体的・対話的で深い学び」を取り入れていくことが必要である。

これらの学びは、栄養教諭養成課程の教育においても取り入れることが必須であり、さらに栄養教諭の特質にあわせていかなければならないと考える。

## VI 栄養教諭養成への活用

栄養教諭は、教育に関する資質と栄養に関する専門性を生かして、学校において食に関する指導を行っている。栄養教諭が食に関する指導を行う際にも、各教科を横断的・総合的に学習していく視点が大切になる。特に健康的な生活を自らが管理していく子どもを育成するためには、主体的に課題を考えることができる「主体的・対話的で深い学び」が必要である。栄養教諭を目指す学生の教育において、他の教諭を目指す学生と同様に、デューイや新学習指導要領が掲げている教育方法を学びの中に取り入れていくことで、効果的な食育指導に繋げていくことができるものと考えられる。

## 参考・引用文献

- 1) 文部科学省：教育の情報化に関する手引き（2019年12月）
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント（2017年3月）
- 3) 岩波文庫：学校と社会、デューイ著（宮原誠一訳）（1957年7月）、29頁
- 4) 同上書、45頁
- 5) 同上書、45頁
- 6) 同上書、39頁

- 7) 文部科学省：食に関する指導の手引き-第二次改訂版-（平成 31 年 3 月）
- 8) 西森緑：綾川町における小児生活習慣病予防健診の現状，香川県小児科医会会誌 37 巻（2016 年）
- 9) 農林水産省：食育推進基本計画 - 第 4 次 - （2021 年 3 月）
- 10) 文部科学省，今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）（2021 年 3 月）
- 11) 学校給食法（1954 年制定）
- 12) 深見奨平：デューイの教育論における経験の能動性と受動性「主体的・対話的で深い学び」における教育者の指導性をめぐって，宮崎大学教育学部紀要 第 97 号（2021 年）
- 13) 春木敏他：ライフスキル形成に基礎をおく食生活教育プログラムの検討，栄養学雑誌 vol. 65, N03（2007 年）